子どもが主体的に追究する社会科学習の展開

――「稲作」における教材開発を通して――

浦添市立前田小学校教諭

玉　寄　美津枝

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 1
Ⅱ　研究の仮説 …… 1
Ⅲ　研究の内容 …… 1
　1　主体的に追究するとは …… 1
　2　教材開発とは …… 3
　　(1)　教材開発の意義 …… 3
　　(2)　教材開発の視点 …… 3
Ⅳ　授業実践 …… 4
　1　単元名 …… 4
　2　単元の目標 …… 4
　3　教材について …… 4
　　(1)　教材観 …… 4
　　(2)　指導について …… 5
　　(3)　児童について …… 5
　4　学習計画 …… 6
　5　本　　時 …… 10
　6　評　　価 …… 11
　7　授業研究会の記録 …… 11
　資　　料 …… 12
Ⅴ　研究のまとめ …… 16
　(1)　研究の成果 …… 16
　(2)　今後の課題 …… 17
おわりに …… 17
《参考・引用文献》

子どもが主体的に追究する社会科学習の展開

――「稲作」における教材開発を通して――

【要　約】

子どもが学習問題を主体的に追究していく社会科学習を展開するために，稲作単元の教材開発を試みた。実際に稲作をしながら，子どもの視点で学習を展開する中で，子どもが問題を追究していく姿がみられた。その結果，体験，調べ学習，課題解決学習等，学習内容が子ども側の要求によるものであることは，子どもが学習問題を主体的に追究するための重要な要素であり，そのためには，子どもが興味・関心をもつ教材開発が必要であることがわかった。

キーワード　稲作教材　主体的学習　体験学習　調べ学習　教材開発

Ⅰ　テーマ設定の理由

現在，社会環境は大きく変化してきた。特に昔の10年サイクルが近年では２～３年で進んでいるような速さになっている。。それに伴い情報化・国際化にも拍車がかかっている。このような変化の激しさに呼応するかのように今はゆとりがなくなり，学校生活，家庭，地域においてもいろいろな問題がでてくる。激動する社会の中で生きていく力を育むため，学習指導要領は「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」の育成を図ることを求めている。

「自ら学ぶ意欲」を，５学年の社会科でどう育てるか考えてみたい。５学年の社会科の目標は，我が国の産業と国民生活との関連を理解することにある。ここでいう産業として農業・水産業・工業・運輸・通信が取り上げられている。特に農業については，稲作の他，野菜，果物，畜産物があり農業の盛んな地域の具体的事例として，稲作は必ず学習することになっている。

ところが，「稲作に従事している人々の工夫や努力に気付くこと」と指導要領には述べられているが，沖縄の子どもにとっては教科書中心の授業にならざるを得ない。それは，全国の耕地面積を調べてみると，その54.3％を稲作が占めているのに対し，沖縄では２％しか水田として利用されていないからである。（第22次沖縄農林水産統計年報・日本国勢図会1995より）それゆえ稲作を身近な農業学習としてとらえることは困難となっている。

このような沖縄における農業の現状をふまえると，前田小学校のほとんどの子どもが水田を見たことがないというのは当然のことである。その実態を考慮して，稲作について子どもに教えこむのではなく，稲作を体験することにより，米へのこだわりをもち，調べていきたいという子ども主体の学習が展開できないものだろうかと考えた。そこで，子どもが自ら見つけ出した学習課題を主体的に追究する社会科学習を展開するために，

・子どもが興味をもって追究していく教材
・稲作における実践的な教材開発
・米作りの体験学習を通して学んでいくもの

について，具体的に研究を深めていきたいと思い本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

子どもの興味・関心を促す社会科の教材開発をし，稲作の直接体験を含むさまざまな学習の仕方を経験させることによって，子どもが自ら見つけ出した学習課題を主体的に追究していく学習態度が育成できるであろう。

Ⅲ　研究の内容

1　主体的に追究するとは

◎子ども主体の学習とその条件

前述したような主体的に追究するための学習が成立するためには，いくつかの条件があると考える。

〈主体的に追究するための条件〉

①　目標・内容について，教師が的確で正

しい把握や解釈をもつこと。

② 学習内容に関する児童一人一人の興味・関心・発問を大事にして学習問題を作る。更に，一人一人の学習問題を生かして，単元全体を見通した学習計画を立てる。

③ 聞き取り・見学・調べ学習・体験など，一人一人が意欲的に取り組む学習活動を促す。

④ 本だけでなく，関係機関の人材リストや専門的な資料など，適切な教材の用意をすること。

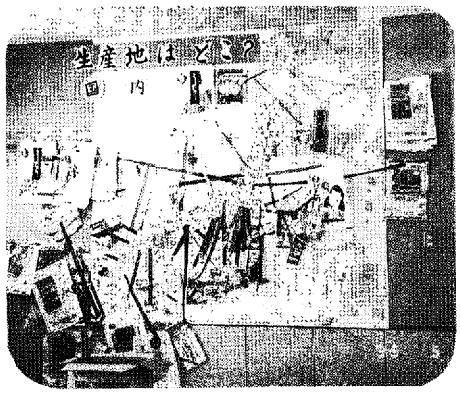
⑤ 教師による的確な発問・助言・援助をすること。

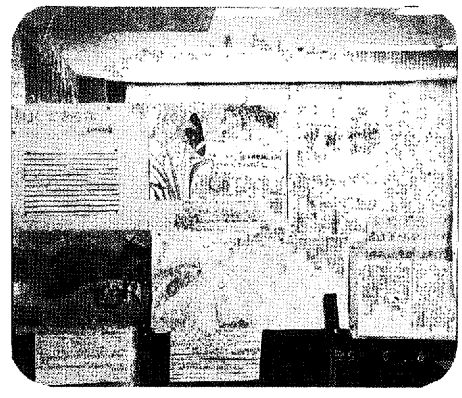
⑥ 調べ学習や体験活動等，学習展開の各所において試みられる一人一人の良さを認め，適切に評価する。子どもの考えを認め，その考えの根拠を明らかにする。助言や話し合いで子ども自身が自己評価を深めて，自ら補充修正していくように配慮する。

⑦ 子どもが主体的な活動をするような，人間関係や物理的学習環境を整備する。

学級の中に，何でも言い合えるような安定感あふれた人間関係をつくる。更に，新聞，レポート，手紙など，追究している現状を知らせる掲示，本や資料を活用しやすい場所に配置するなど学級の学習環境を整える。

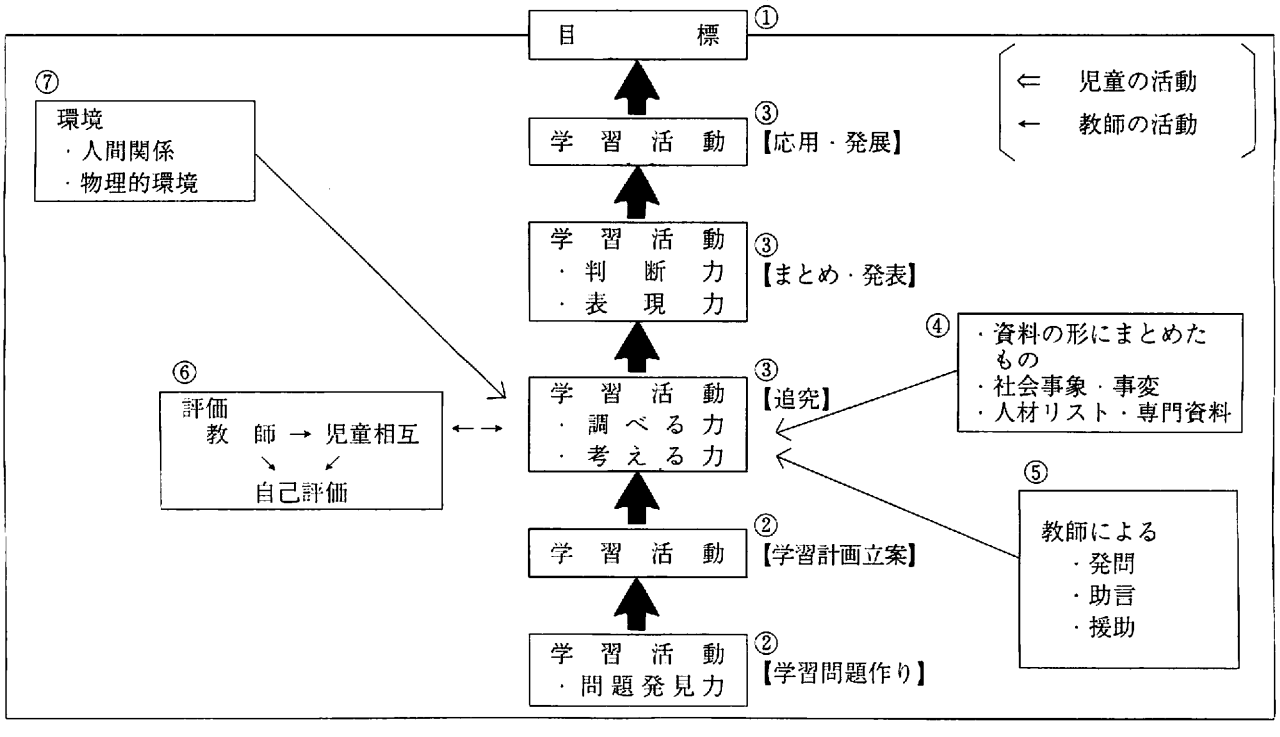
以上，７つの条件をもとに，それを図に表してみたい。





子どもの活動がよくわかる掲示

《主体的に追求するための条件》



このような学習過程を通して，自分なりのものの見方や考え方の体系がつくられていく。そのことによって，子ども一人一人が生活や学習の中で具体的な問題場面に出会った時，状況を正しく把握し判断できる。更に，その子なりに問題点をより客観的・総合的にとらえたり，問題状況に対する解決方法を工夫したりして，より適切な対応を考えることができるようになると考える。

2　教材開発とは

(1)　教材開発の意義

授業の中に驚きや感動があり，おもしろさがあるような教材開発をすることは，社会科をすきになる子，社会科に熱中する子を育てることになる。子どもの生活を見つめ，その子どもの生活に関係の深いものから教材を見つけ，授業にのせる。そのような実践をやることにより，子ども自身の好奇心や感受性に働きかけることになり，どうしても学習に主体的に関わらざるを得ないような，内発的動機づけがなされる。

(2)　教材開発の視点

教材開発をすすめる場合，単なる思いつきや資料からの見た目によるおもしろさをまねるようなことや体験学習のみで終わることはさけたい。

つまり，生活科では体験活動をすることが「目標」の１つになるが，社会科では社会認識を高めるための「手段・方法」として位置づけることが大切である。体験活動は多いに活用して子どもたちの認識力を高める必要があるが，それだけで終わらせてはいけない。

そこで，教材開発をする場合，学習させる教師の立場と，学習する子どもの立場からの視点で検討しなければならない。

《学習させる教師の立場からの視点》

①　教材が，学年の学習の目標や内容に即しているか。

学習指導要領の学年の目標や内容が目安になる。ただ，学習指導要領に示される目標や内容の表現は基本的で，簡素化されているので，実際にはそこにある解釈の幅を十分に検討しながら，個々の事物・事象を選択し，取り上げていかなければならない。

②　教材は，子どもの発達段階を考慮して，子どもが解決可能な問題を含んだものであるか。

知的な理解の面でも，学び方の面でも，子どもが自力で解決できるものを見通すことである。それには，子どもの発達段階，地域での生活や学習の経験などを十分に考慮していく必要がある。

③　教材は，具体的・実感的なものか。

特に地域教材では，取り上げた地域の事物・事象を通して，その意味が具体的・実感的にとらえられるものが期待されなければならない。

《学習する子どもの立場からの視点》

①　教材は，子どもにとって興味・関心がもて，意欲的に取り組めるものか。

教材の内容が子どもの生活に密着しており，自分の問題として意識できるものが望ましい。そのような教材は子どもの興味・関心や意欲を起こすと同時に，追究していく活動を発展的に持続させていくことにつながる。

②　教材は，子どもの生活経験に根ざし，観察や体験などの活動を通して，実践的に学ぶことができるものか。

子どもが自ら見たり，聞いたり，食べたり，触れたり，育てたりすることによって教材の内容を発展的にとらえる。更に自らの考えを，体験することによって得た事実に照らして検証していくことができるようなものが期待される。

③ 教材は，社会において主体的に生き抜く姿勢が，学べるものか。

子どもが具体的・実践的な学習を通し，そこに関わっている人々の努力や生きていく姿勢をも学びとり，社会において主体的に生き抜こうとする気持ちを起こすようなものが期待される。

以上のような視点で教材開発をすることによって，子どもが教師からの教えを一方的に受けるだけでなく，自らの問いの発生や意欲的な追究，学ぶ力を培うことができると考える。

Ⅳ 授業実践

社会科学習計画案

平成７年６月14日(水)

浦添市立 前田小学校 ５年３組

男子17名 女子13名

1 小単元名 「稲作にはげむ人々」

2 単元の目標

◇我が国の稲作の盛んな地域の様子を調べ，稲作にたずさわる人々が生産を高める工夫をしていることや，稲作の現状をつかむ。

◇稲作に関する写真や資料などを収集・選択し国民生活を支える稲作の意味を多面的・関連的につかむ。

3 教材について

(1) 教材観

本教材は，５学年の産業学習のスタートとなる単元である。５学年の産業学習では，我が国の食料生産・工業生産の特色及び運輸・通信などの産業の様子や，これらの産業と国民生活について理解できるようにし，我が国の産業の発展に目をむけていく。この中で，国民生活を支える食料生産の１つとして農業が取り上げられている。

小単元「稲作にはげむ人々」では稲作の盛んな地域をたずね，農家の現状や問題点，人々の工夫，願いを学習していく。しかし，沖縄は稲作が盛んではなく，身近な地域に水田がないため田植えの経験どころか，水田でさえ見たことがない……というのがほとんどである。したがって，種もみを水に浸けるところから稲作の全行程を体験させる作業学習をとりいれ，直接体験をすることにより本小単元の目標でもある稲作にたずさわっている人々の努力や工夫，願いを共感的に理解させるという学習過程をとっている。

また，小単元全体を，児童が自分で課題を見つけ，解決したり新たな疑問に取り組んだりする調べ学習を中心に進めていけるよう留意している。

【「稲作にはげむ人々」における教材開発】

まず，稲作についてわからないことを出し合う。それは子どもが「調べてみたい」「追究したい」ということを自由に出させることにより，自分の身近に稲作農家を近づけ，稲作の現状にせまりたいと考えた。

ややもすると，子どもから学習意欲や問題意識が出てこないうちに，教師が問題を押しつけて調べさせることがある。それは「教えよう」という意識が強すぎるからではないだろうか。それをやめて，子どもの追究する意識に信頼をおく授業を開発したいと思った。

教科書では，いきなり稲作の盛んな地域として白根市の農家を取り上げて学習することになっているが，児童期の発達段階にある小学校の子どもに対して，言葉だけの学習をしたのでは納得させることはできない。確かな理解を得させるために，具体物や具体的な活動，五感に訴える体験が必要である。

例えば，教科書で品種改良の意義を説明していても，子どもには，なぜ品種改良が必要なのか品種改良が農家にどういう影響を与えたのかなかなか理解できない。しかし，実際に何種類かの米を食べ比べる活動から始める

と，外観・におい・ねばり・おいしさなどの違いに気づき，「どれも米なのになぜ違いがあるのだろう」と自ら具体的な疑問を生むことにつながる。その疑問に対し「生産地が違うから」「品種に違いがあるから」などと予想を立て意欲的に追究していくと思われる。このような，具体的で，しかも子どもから主体的に出た問いで学習問題を作成し追究していく教材開発を稲作単元で試みた。

この単元の教材開発のもう１つの特徴は，実際に田植えをし，稲作の全行程を体験しながら，同時に稲作農家を訪ね，農家の人が語る言葉を共感的に受け止めることができ，そこから農家の問題点をつかめる子どもを育てることである。

例えば，「農家の人々の工夫や努力」を教科書に書いてあるものをただ読むだけでは理解しにくい部分がある。しかし，田植えをし一生懸命育てた稲が被害にあった場合，とても心配になり農家の人々の願いと重なる。農家の人が言った「１番うれしいのは稲が丈夫に育つこと」という言葉に共感できるのだと思う。そのような体験学習をさせながら，疑問に感じた課題を主体的に追究していく子どもを育てたいという思いから小単元「稲作にはげむ人々」を教材開発した。

(2) 指導について

米について，いろいろな点から調べていく中で，実は稲作は自分達の食生活を支えているものの１つであり，その向上のために長い年月多くの人々の努力があったことに気付かせたい。更に，機械化や輸入米などの現在の問題にも自分達でふみこんでいかせたい。

具体的には，米に関する疑問をどんどん出させ，児童自ら課題意識をもたせる。その上で子どもの思考の道筋にあわせた学習過程を構成していく。実際に何種類かの米を食べ比べたり，稲作農家を訪ねたり，本や資料だけでなく食料事務所など専門家も紹介していく。稲を育てながら，米にこだわり，追究していく児童主体の学習内容にしたい。

(3) 児童の実態

子ども達は，第３学年の「自分たちの市」を中心とした地域の重要な生産活動の学習で，農業のようすを学んできた。また，第４学年では，自然条件から見た国内の特色ある各地域の学習で自然環境との関わりにおいて，各地の農業についてある程度学んでいる。

しかし，日常の食卓にならぶさまざまな食品は，スーパーや小売店などから買い求めてきたものであり，それらの品物を生産している人々の工夫や努力，願いについて考えることは，ほとんどなかったと思われる。特に稲作については，前述したように浦添市には水田がなく，他県の子どもに比べ関心が薄い。しかしながら前田小学校では，昨年校内に田んぼを作ったので，子ども達は４年生の時，５年生の田植えや３年生の古い道具を使っての脱穀を多少見聞きしているので，今年は自分達も田植えができると，期待していると思われる。

一方，資料の収集や選択については，学習の目的にあった資料の選択ができない子や，資料を見つけても，そっくり写すだけの作業をする子などが見られ，ほとんどの子が統計資料の活用がうまくできないのが現状である。

稲作の学習に入る前に，米に関する疑問を出し合ってみたところ「なぜ味がないのかな」「米は何種類あるのかな」「米の原産地はどこかな」など52の疑問が出た。それは，稲作の栽培や歴史，栄養，など多岐にわたっていたが，農家の人たちまではまだ関心がむけられてはいなかった。しかし，浸種，播種，田おこし，しろかきと田植えに入る前の予想外の労働を体験した後，子どもの関心は広がりはじめていった。子どもから「農家の人々の悩みって何だろう」「どんな工夫をしているのかな」「稲作は農業の中のどれぐらいを占めているのかな」「農業以外の仕事もしているのかな」などの声が聞かれ，主体的に追究す

るための大きな要素である興味・関心を示し
はじめている。

4　学習計画（9時間）

流れ	時数	主な学習活動	教師による援助・助言	資料・情報・準備
つかむ	1	・資料集を基に日本の農業について話し合い，我が国では全体的な耕地面積における稲作の割合が高いことを知る。 ・米について知りたいことをカードに書く。 問題作りをしよう ▷同じ米でも味は違うのかな ▷米にはどんな種類があるのかな	・稲の種もみや米袋を見せながら「米」への関心を高める。 ・思ったことを自由に書かせる。 ・子どもの感想や疑問を整理して学習問題を作り，小単元の学習過程を組む。	・昨年，前田小学校で収穫された種もみ ・子どもが家から持ってきた市販されているさまざまな米袋 ・カード
追究する	1	米を食べ比べてみよう ① 三種類の生米を比べる。 ▷形や色がちがうよ。 ▷においをかいでみよう。 ② 観点を決めて食味をし，自分が比べた結果や疑問などをカードに書く。 ▷色が少しちがうよ。 ▷炊くと味はどうなっているのかな。 ▷歯ごたえはちがうかな。	・米は子どもにとって食べ物としては身近であるが，農作物としてはなぞが多い。そこで，全国で1番多く作られているコシヒカリ，新銘柄のきらら397，沖縄で栽培されているチヨニシキを取り上げて「食べ比べる」という活動から問いを生み，追究の意欲化を図る。 ① 食味をする銘柄の生米から比べさせる。 ② 食味をする場合，別の銘柄に移る前に水で口をゆすぐようにする。 ※米を炊く条件を同じにする。（炊飯器・水・時間） 銘柄は伏せておく。	・米袋 ・米の銘柄 きらら397 チヨニシキ コシヒカリ ・色画用紙 米を赤・青・黄でわけるため 大皿 それぞれの米を盛るためグループに三枚 小皿・はし 茶わん　人数分 やかん（グループに1つ） 炊飯器 しゃもじ ・カード

流れ	時数	主な学習活動	教師による援助・助言	資料・情報・準備
		・なぜ同じ米なのに違いがあるのか，予想を立てる。 ▷品種が違う ▷生産地が違う ▷育て方が違う	・ただ食べさせるのではなく外観や香り，かたさ，ねばりなどの観点を設け，同じ米でも違いがあることに気付くようにする。	
追究する	2	① 前時のまとめ 食味体験を通しての疑問を出し合い，米の品種について調べ学習をする。 稲作の盛んな地域はどこで，そこではどんな品種を育てているのか。 自分で課題を決め，本や資料から調べて調べカードに書いていく。 ② 調べたことを，みんなに発表する。	・地域を指定してもよいし，全国的に調べてもよい。 ・品種改良にも目をむけさせる。 ・日本お米マップを作らせ，品種と自然条件の関係を視覚的にとらえさせる。 ・本や資料を一緒にさがしたり，更に発展するための助言など，個に応じた指導をする。 ・調べ学習をしていくうちに出た新たな疑問も記述するようにする。 ・資料を写すだけでなく，そこから何がわかったのかをはっきりさせる。 ・OHPなどを使い，みんなにわかりやすい発表ができるようにする。 ・本や資料だけでなく，専門機関の人からも取材ができるようにする。	・稲作に関する本や資料 ・稲作に関する専門機関の人に直接聞き取りをするための情報 金武農協集荷場 968－3670 （比嘉さん） 沖縄県食料事務所 866－0155 （高江洲さん） 農業試験場名護支場 098052－6052 （比嘉さん） 北部農業改良普及所 098052－4986 （伊芸さん）

流れ	時数	主な学習活動	教師による援助・助言	資料・情報・準備
追究する	2	稲作農家をたずねてみよう ① 計画を立てる ねらい 日　時 場　所 準備するもの 見学の心得 調べたいこと しおりにする。 ② 水田を見学し，稲作農家の方から話を聞いてまとめる。 ・実際の農作業を観察しまとめる。 ・敷地内の様子を観察する。 ・知りたいことを聞く。 ・農家の人々の願いや仕事の工夫を知る。 ・能率を高めるための機械化や農家の作業の変化に気付く。	・児童からの質問事項などは事前にまとめ，伊芸さん（農家の方）に知らせておく。 ・水田の広さや米の生産量など正確な数字の資料を依頼しておく。 ・専業農家，兼業農家など農家の現状について話してもらう。 ・機械化の問題にも触れ，共同使用をはじめ収入を高める工夫についても考えさせる。 ・稲作は，品種改良という組織的な工夫や努力と共に，水害を防いだり，水田に適した土地改良など地域の人々が一丸となって行う工夫や努力によって支えられていることもとらえさせる。 ・いろいろな問題をかかえながらも米作りにかける思いや願いを知り，米作りへの自分の考えをもつことが出来るようにする。	・校外学習のしおり 〔校外学習〕 金武町屋嘉 ・農家の方 伊芸さん ・機械 コンバイン 自動田植機 脱穀機 バインダー
まとめる	1	米のこだわり探険隊出発 ・自分が調べたいテーマを見つける。	・子どもの追究したいテーマにそって，学校及び市立図書館，食料事務所などから集めた本や資料コーナーを設置する。	・本，資料 沖縄県の産業 沖縄県食料事務所 業務概要 稲という作物 本来を見つめる農場

流れ	時数	主な学習活動	教師による援助・助言	資料・情報・準備
		・同じテーマの友だちがいたらグループを作って共同で調べる。	・写真やグラフ，図の読み取りなど基礎的な資料活用の能力育成に配慮していく。 ・テーマにあった見出しをつけ，イラストや図表を使って見やすく，わかりやすいまとめをさせる。	米を作る農家 社会科資料集 お米ができるまで イネの一生 ごはん料理の本 沖縄県の産業 植物とバイオ 浦添市史　第6巻
まとめる	2	米のこだわり探険隊報告 ・まとめた作品を発表する。 ○米はなぜあるのか ○米5キロの米粒の数 ○米でどんな料理ができるか ○米からは何が作れるのか ○ササニシキの由来 ○未来の稲作 ○なぜ沖縄では稲作が盛んではないのか ○前田の米作り ○稲作農家をたずねて ・発表を聞きながらメモをとる。 ・質問に答える。	・各テーマにそって資料から得た事実をもとに，自分あるいはグループの考えを発表させる。 ・各グループの発表を聞いて，わかったことや疑問に思ったことなど自分の感想をしっかりもたせる。 ・OHP，新聞，パンフレット，図表，実物などテーマにあった発表の仕方を工夫させる。 ・質疑応答の中で，確かな答えが出ない場合は結論を急ぐのではなく今後の調べ学習に発展させるようにする。	・OHP ・ビデオ 視聴覚機器 ・写真 ・実物 ・図表 ・パンフレット ・新聞 ・ワークシート

5　本時（9／9）

(1)　ねらい

◇米にこだわり，追究し，それをもとに自分の考えを発表することができる。

◇友だちの発表を自分の調べたことと関わらせながら聞き，稲作についての考えをより深めることができる。

(2)　展　開

	主な学習活動	教師による援助・助言	資料・情報・準備
つかむ	1　これまでの調べ学習の感想を述べる。	・各グループに30秒間，感想を述べさせる。 ・米のこだわり探険隊がこれまで意欲的に活動していた様子を評価する。	
追究する	2　自分たちが調べたことを発表しよう。 米のこだわり探険隊　報告 ○米５キロの米粒の数 ○米でどんな料理ができるか ○なぜ沖縄では稲作が盛んではないのか ○前田の米作り ○稲作農家をたずねて ・発表を聞きながらメモをとる。 ・質問に答える。	・各テーマにそって資料から得た事実をもとに自分（グループ）の考えを発表させる。 ・５分間で発表できるように，まとめ方を考えさせる。 ・各グループの発表を聞いて，わかったこと，疑問に思ったことなど自分の感想をしっかりもたせる。 ・OHP，新聞，パンフレット，図表，実物など，テーマにあった発表の仕方を工夫させる。 ・発表を聞きながら，ポイントをつかんでまとめるようにする。	・OHP ・ビデオ ・写真 視聴覚機器 ・実物 ・図表 ・パンフレット ・新聞 ・ワークシート
まとめる	・各グループの発表と自分の調べたことをてらしあわせて，新しくわかったこと，疑問に思ったことをまとめる。	・発表を聞いて疑問に思ったことは結論を急ぐのではなく，今後の調べ学習に発展させるようにする。	

6　評価

① 米にこだわり，自分で見つけた課題をどんどん追究して，それを発表することができたか。

② グループのテーマ作りや，まとめ方に資料を生かしたりなどの工夫が，効果的にできたか。

③ グループのまとめが羅列的でなく，グループの考え・主張が明らかになっているか。

④ 友だちの発表を聞くことにより，稲作についてより深く，多面的に考えることができたか。

7　授業研究会の記録

(1) 授業者の反省

本時は自分達で米に関する課題を見つけ，追究した内容を報告するというものだったが，こども達は生き生きと発表していた。調べていくには，決して十分とは言えない期間でとてもよくがんばったと思う。又，聞くほうも，ワークシートにメモをしながら聞いていたので，意見，質問も多く全員が参加した授業となった。

「発表は2時間位続けた方が，じっくりと意見を交換しあい，深まるのではないか」という指適があったが，自分としても時間的に少しきつかったのではないかと思われるので，今後検討していきたい。

今回は，本単元を子どもの疑問から出発し，常に子どもの状態を見ながら進めていった。子ども達は，先生から教えられているのではなく，自分たちで社会科の授業を作っているのだという気持ちになっていた。視点を子どもに合わせることで，こんなにも生き生きと学習課題に取り組むことができるのかと，改めて実感した。

(2) 意見・感想

・大人も勉強できる発表の内容であった。

・1時間に5つの発表は時間的にきびしいのではないか。弾力的な時間割の編成を考えてはどうだろうか。

・子どもにもっと討議をさせてもよかったのではないか。

・内容が教科書よりふくらんでいた。

〈教師について〉

・グループ発表の合間に教師が重要な言葉やこれまでの経過などを話していたのがよかった。

・発表者がうまく答えられない質問に対する対処の仕方がよかった。

・直接体験を通しての子どもの変容を，この先も観察していってほしい。

〈児童について〉

・全員が授業に参加していた。

・助け合う場面が見られた。
発表の途中で言葉がつまると，さっと耳もとで教えるなど協力しあっていた。

・子どもの変容が見られた。
授業開始時は発表を聞くだけだったが，だんだん積極的に意見や質問をするようになった子がいた。

・もっとOHPを活用してもよかったのではないか。

・発表の手順がよかった。
資料の準備・片づけに無駄がなく，発表，資料の指示など役割分担がきちんとできていた。

(3) 指導助言

・発表形式の授業では，教師が学級の児童の様子をよく見て内容のどこまで切り込むのか，適切に判断することは極めて大切なことである。本時では，教師の良い判断，すばらしい見極めで子どもが生かされていた。

・「陸稲」の質問を受け，回答に窮した子どもに「もう一度調べてごらん」と返したのは良かった。
そのグループの今後の活動を見届け，発表の場を設けて欲しい。

・川の名前をまちがえてしまった子がいた

が，訂正は早めに確実に行うのがよい。

・５学年当初のこの時期に，体験学習や調べ学習の仕方を徹底して学んだのは，大変有意義なことであり，今後の生きた確かな学力となる。

・単元最終時間である本時において，子どもたちの学習内容活動をみると，本単元のねらいは，全部達成されていると評価する。教材研究がよくなされている。

・地域学習，体験的学習が重要視されている今日，研究テーマに「教材開発」を取り上げ，実践研究をしたのはすばらしい。そこで今後の課題として，稲作の他に，どの単元のどの場面でどのような開発が可能なのか，教材開発の意義，その視点，留意点など，この機会に理論研究を深めてもらいたい。

食べ比べをして，気がついたことや不思議に思ったことを書きましょう。

・横が一番おいしかった。
・あじがちがうのは，そだて方によってかわるのだろうか。
・青い米は，たいても，先のほうが横だった。
・横はたくさんねばりがあったけど，赤はあまりなかった。
・味がちがうのと，ねばりがちがうのは，なにかかんけいがあるのだろうか。
・同じ米なのに味，形，色，においがちがうのは，なぜだろう。
・ちがうところがあるのは，たねにふしぎがあるのかな

資料①　子どもの声（食べ比べ）

米の味はちがうのかな。食べ比べをしてみよう。

名前 奥川留里子

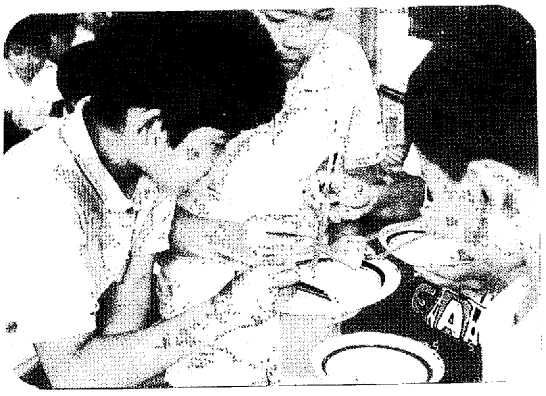
米	赤	青	黄
味	味がない	味がないような味	おいしい
形	ふっくらしてほそながい	ほそながいのもふっくらしているのもある	あまりほそながくなくふっくらしてる
におい	あまりしない	ひえたようなにおい	たきたてのようなにおい
色	白，ぽいべージュみたい	白	白
はだざわり	かたい	赤よりかたい	やわらかいようなかたいようなかんじ
ねばり	少しパサパサしてる	くっついたりしてねばりがある	あまりねばりがなくてパサパサもしてない

米の味はちがうのかな。食べ比べをしてみよう。

名前 のむらゆかり

米	赤	青	黄
味	少しあまい	あまくない	1番おいしい
形	細長い	少しまるい	まるくもないし細長くもない
におい	しなかった	あまりしなかった	あまそうなにおい
色	少しとうめい	先が黄	白ぽいのがなかった
たはえこ	少しやわらかい	赤よりもかたい	やわらかい
ねばり	あまりない	ねばりがある	ねばりがとてもある

資料②　子どもの活動



食べ比べ

見　学

追究（関連機関に電話で聞く子）

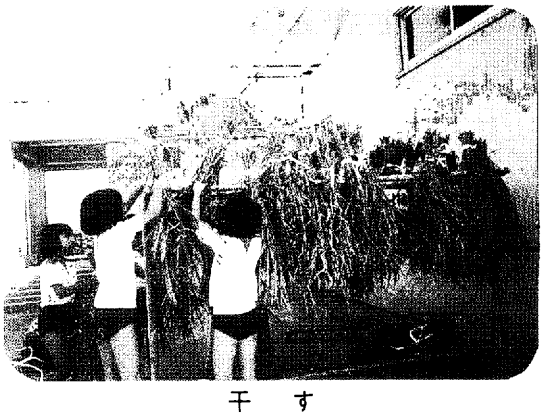
発　表

資料③　稲　作

田おこし

田植え

稲刈り



干　す

資料④　子どもの声（米に関する疑問）

4月12日　記入

・米は何種類あるのかな。
・どうやって種類を見分けるのかな。
・何カ月で実るのかな。
・植え方はいくつあるのかな。
・外国の米はなぜおいしくないのかな。
・国によって米は違うのかな。
・米のしくみをしりたいな。
・米の栄養はどれくらいかな。
・米はなぜ白いのかな。
・米はなぜやわらかくなるのかな。
・米は誰が作ったのかな・
・米はどうやって育てるのかな。
・米はなぜもみにつつまれているのかな。
・米の形はなぜちがってくるのかな。
・世界で米はどれくらいとれるのかな。
・米は何月に植えるのかな。
・外国の米はどうやってうえるのかな。
・米は農業のなかのどれぐらいを占めているのかな。
・米はどれくらいもつのかな。
・１年間にどれくらいとれるのかな。
・米でどれくらいのものができるのかな。
・米はどうやって袋に入れるのかな。
・米はどうやってからをぬぐのかな。
・米はどうやって食べるとおいしいのかな。
・昔の米はどんな米かな。
・米は日本人が食べる分，まにあっているのかな。
・稲ができたあとはどうするのかな。
・米は冬でもよく育つのかな。
・米はなぜ味がないのかな。
・１本の稲にどれだけの米粒がついているのかな。
・あまい味や辛い味の米はあるのかな。
・米はいつごろ日本に伝わったのかな。
・米の原産地はどこかな。
・小麦と米ではどちらが多くとれるのかな。
・米はどのように品種改良をするのかな。
・米はなぜ「コメ」という名前なのかな。
・米は何日間で根がでるのかな。
・どれくらい育つと水田にうえるのかな。
・炊く前はほそいのに，どうしてたくとやわらかくなるのかな。
・生のままだとおいしくないのに，なぜたいたらおいしくなるのかな。
・昔と今の米ではどんなちがいがあるのかな。
・水田では水かけはしなくていいのかな。
・水田の水はとりかえるのかな。
・米は野菜なのかな。
・なぜ米からまた米ができるのかな。
・どれくらい大きくなるのかな。
・どれくらい幅をあけて植えるのかな。

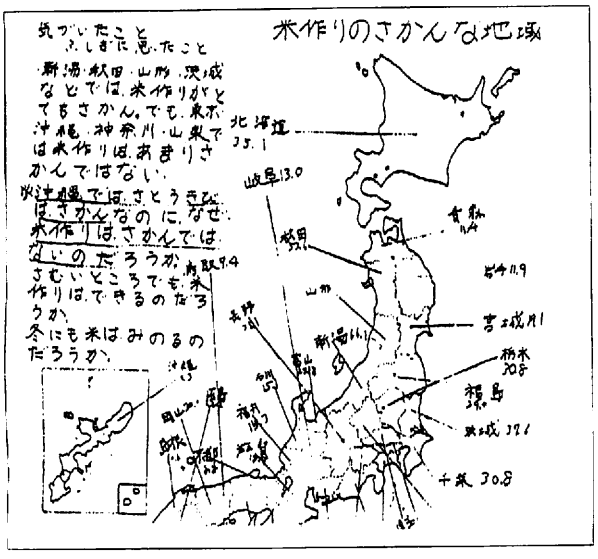
4月27日　田おこし・田植えの後　記入

・農家の人々の悩み
・農業以外の仕事もしているのかな。
・困っていることはどんなことかな。
・どんな工夫をして努力しているのかな。

考　察

◦単元に入る前に子どもの疑問は原産地を含めた各国の米についてその歴史，色や形，味覚，調理法等食料としての興味，植物の成長としての理科的関心など単純列羅的である。
◦田おこし・田植えの後は，疑問的内容が焦点化されてきて，単元のねらいにせまる内容となっている。

資料⑤　追求



教科名 社会科	日付 5/29	名前
調べたい問題	なぜ沖縄ではいなけがさかんではないのか。	
どこで	教室	
何を利用して調べたか	本　　など	

調べてわかったこと、気がついたこと

①米のせいさんを調べ

②沖縄の米作りのさかんな所
　ちず

・米のせいさんりょうのへんか
　グラフ

・なぜさかんでないのか
　理由1（いせんじょうきょう）
　（平野の大きさ　くらべ　川の大きさ　で）
　理由2（くんようちにとられた）
　（はなしを聞く、ちずに書く）
　理由3（じゅうたくちにした）
　理由4（米をゆにした）でんわ
　理由5（さとうきびのほうがりえきがある）
　（米作りのしゅるい）
　（のうさぎょう、のうか）
　理由6（たいふうがきてだめになった人の話）

③沖縄でいな作を作っている人のねがい

教科名 社会	日付 5/22	名前 野村由香利
調べたい問題	沖縄では、なぜいな作はさかんではないのだろうか(1)	
どこで	浦添市立前田小学校5年3組教室	
何を利用して調べたか	本、資料、など	

調べてわかったこと、気がついたこと

・いねは、あたたかく雨の多い気候に適している。気候の点では、沖縄はいな作にてきしたちいきといえる。しかし、いな作をするための広い平野や田に水を引くための大きな川が少ないため田を作るのにはてきしていない。また、田の多くが軍用地にとられたり、住たく用地としてうめ立てされたりしたことや、沖縄県が日本にふっきする前は、外国からぜい米をゆにゅうすることができたことなどからいな作はさかんではないようで、いな作にくらべてさとうきびのほうが利益があるというのもいな作がさかんでない原いんになっている。

教科名 社会	日付 6/8	名前 野村由香利
調べたい問題	沖縄が日本にふっきする前に、外国から米をゆにゅうしていた米の名前やどこからきているのか。	
どこで	でんわ	
何を利用して調べたか	金武兼荷場（968）70　比嘉さん	

調べてわかったこと、気がついたこと

・アメリカカリホルニアから（かしゅうまい）

・その他、ジャポニカシュなど…

・今の大人の人が5年生ぐらいの時は、タイから、タイ米をゆにゅうしていた。

（きょうとう先生から聞いた話）

*カリホルニアマイ（カリホルニアから）

*タイ米（タイ国から）

*ビルマイ（ビルマから）（ミャンマー）

V　研究のまとめ

1　研究の成果

(1)　自分で課題を決め，主体的に追究することができた。

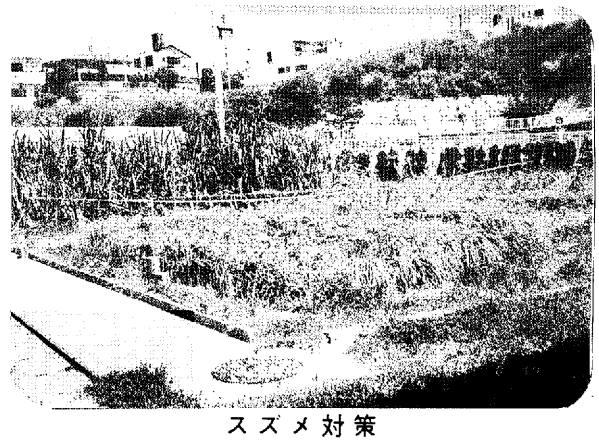
- 「米はなぜ白いのかな」「どうしてやわらかくなるのかな」と言っていたS君は品種改良の調べ学習をしているうちに，稲の起源に興味をもち追究していった。これまで，やるのは早いが何事も表面的で深めていくことの苦手だったS君はT君と本を調べ，食料事務所の人に何度も電話で質問をした。その熱意に食料事務所の方から返事の手紙とたくさんの資料が送られてきた。S君とT君は難しいその資料を一生懸命読み，追究していった。
- H君達は自分の住んでいる前田にも昔は田んぼがあったと聞き，自発的に地域の古老に話を聞いて回った。
- 子どもの興味・関心を大事にして，学習課題を教師の指示がなくても子どもが教室にしばられることなく，主体的に学習活動を展開していった。例えば，図書館に行く子，地域に出かけきき取りをする子，専門機関に電話で聞く子，実際に米料理を調理する子などである。

(2)　単元の目標である「稲作に従事している人々の工夫や努力に気づくこと」を，子どもは十分達成した。

- 最初は農家のことは意識していなかったが，田おこしでかたい土と格闘しながら「農家の人ってこんなきつい仕事してるの」という声があちらこちらから聞こえた。
- 3kgの米粒を数えたR君たちは，14万粒以上ある米粒は4人家族で約1週間で消費してしまうことを知り，日本全国民の主食を支えている農家の人たちは偉い，ということを発表の中で述べている。
- 台風3号により稲が倒れたのを見たT君は「とても信じられない光景だったよ」と担任に訴えた。

台風の被害

- 稲刈りを済ませた後，ほとんどの子が「台風にあったり，スズメに食べられたり，いろいろあったけど，とにかく無事に稲刈りができてとても嬉しい」「早く食べたい」と言っていた。



スズメ対策

- 4か月前までは意識の外にあった農家の人たちの気持ちに共感できるようになっていた。

　そこから又，発展的な学習問題を子どもはつかみつつある。つまり，台風が来る沖縄における稲作の工夫についてである。そういうことが，例えば，他県の冷害に強い品種作りなど「稲作における工夫と努力」への共感へと広がって行くだろう。

(3)　教材開発により子ども主体の活動を教師が支援するという学習形態で進めた結果，子どもに変容が見られ，成長が感じられた。

（子どもの文から）

- 私の家はおすし屋さんです。今までは米のすばらしさがあまりわかっていなかったけど，今はお父さんが米を大事にする仕事でよかったです。
- 沖縄には大きな平野がなく川も短いけれど，そんな悪い条件の中でも工夫して稲作をやっている農家があることを知り，すごいなあと思いました。これからも沖縄の稲作について調べていきたいです。
- 私たちは，米の勉強が終わっても，少しでもいいから米のことを調べようと思います。
- 稲作もさとうきびぐらい盛んになってほしい。前田小での稲作を成功させて，浦添市，沖縄県に広めたい。

（稲作の学習も終わった７月中旬）

- 男子４名，女子７名が沖縄県食料事務所主催のライスクッキングフェアーコンテストに応募した。

(4) 子どもが調べ学習を展開していく中，食料事務所，農協，農業試験場，農家の人，地域の人々など多数の大人が，親切に対応してくれた。子ども達が，多くの大人への尊敬，信頼を得たことは素晴らしい経験だと思う。

2 今後の課題

(1) 聞き取り・見学・しらべ学習・体験など一人一人が意欲的に取り組む学習活動を促す場合，どうしても学習時数の確保が困難になってくる。他の単元の時数の関連など学年又は学校全体での話し合い，協力体制をしっかり組み，教材開発した内容を年間計画の中に位置づける必要がある。

(2) 今回，収穫の時期に台風にあい，台風対策の栽培ステージなどもっと深い研究が必要だったと思う。

(3) 数多くの農家の人の考えに接することにより，そらに多面的に農業の実態を学ぶことができると思う。そのために，稲作に直に関わっている農家や全国の農協の人たちと手紙や資料のやりとりで活発に交流が深まっていく方向への援助のあり方を研究し，深め実践していきたい。

おわりに

これまで，いつも時間に追われ，明日の教材研究さえままならない状態でしたが，研究所に入ってじっくりと自分の研究に取り組むことができました。この６カ月の間，いろいろな人・本・資料に出会え私にとって実り多い期間でした。

研究期間直接指導して下さった与那覇律子指導主事，研究所の田中一郎所長，与那覇武係長，當間正和指導主事に深く感謝申し上げます。また，研究する機会を与えて下さった久場良重校長先生，温かい言葉かけを下さった教育委員会の先生方，常に励まし合い，支えてもらった研究員の方々に厚くお礼申し上げます。最後に，私の研究及び検証授業に学級を提供して下さった前田小学校宮城アケミ先生に感謝申し上げます。

《参考文献・引用文献》

文部省：小学校学習指導要領．大蔵省印刷局．
文部省：小学校指導書　社会編．　学校図書．
古川清行・桑原利夫 編著：子どもが生き生き学ぶ社会科．東洋館出版社．
次山信夫・東京都大東区立西町小学校 共著：地域素材を生かす社会科単元の開発．東洋館出版社．
田中力：社会科の教材開発と体験活動．有田和正 解説，教育出版．
有田和正：「追究の鬼」を育てる．教材発掘から授業作りへ・高学年，著作集，明治図書．
寺田登：社会科における指導法改善の具体化．初等教育資料（1995）．　東洋館出版社．